定期検診が寄生虫から身を守る

フィラリア以外にも 危ない線虫がいます!

犬の消化管内に寄生する代表的な寄生虫には「犬回虫」「犬鉤虫」などがいます。数多く寄生すると、下痢や嘔吐などの消化器症状、吸収されるべき栄養が奪われることによる栄養失調を起こします。また、犬鉤虫は貧血を起こすことも。

犬回虫

犬鉤虫

犬フィラリア症予防薬の中には、消化管内線虫も駆除できるお薬があります。フィラリアと同じように駆除を心がけましょう。

※消化管内線虫は種類によって、駆除するために必要なお薬が異なりますので、獣医師の指示に従って正しい対策をしましょう。

定期検診もお忘れなく

早期発見・早期治療が大切

家族である愛犬の体調の変化、健康状態をこまめに観察しながら、たっぷりの愛情を注いでください。早期発見、早期治療が何よりも大切。獣医師と二人三脚でわが子を病気から守りましょう。

投薬日をメールでお知らせする安心・便利な
投薬日お知らせサービス
http://www2.fujita-pharm.co.jp/pi/
へアクセスして下さい。

携帯からアクセス

詳しくは当院にご相談ください。

フジタ製薬株式会社
東京都品川区上大崎2丁目13番2号
http://www.fujita-pharm.co.jp

物産アニマルヘルス株式会社
大阪府大阪市中央区本町2丁目5番7号
https://www.bussan-ah.com

NOR
3392AH

ず〜っと一緒にいたいから、長く付き合えるお薬を。

やさしく、たのしく、おいしくフィラリア予防

愛犬がよろこぶ

犬フィラリア症予防薬

毎月一回、しっかり予防

お薬が効くのはちょっとの間だけ。
続けやすいフィラリア予防薬を。

フィラリアの幼虫が血管に侵入する前に対策することが大切。
お薬の成分がからだの内に残りにくければ、負担がかかりにくく、
生涯付き合いやすいでしょう。
飼い主様も愛犬も投薬ストレスが少なく、ずっと続けられるお薬を。

どんな予防薬があるの？

予防薬にも種類があります

犬フィラリア症の予防薬には、経口投与（口から飲み込むタイプ）のものと皮下注射、皮膚滴下のものがあり、それぞれ有効成分と、効き方が異なります。

有効成分が体内に残りにくいお薬があります

決められた期間、毎月１回経口投与している犬フィラリア症予防薬の有効成分は、投与後の数日内に代謝・排泄されていることをご存知でしたか？
フィラリアの感染幼虫が成虫になるライフサイクルを、決められた間隔で定期的に断ち切ることで、犬フィラリア症の発症を予防します。
月１回の経口的な投薬は、投与しやすい国産牛肉を使用したチュアブル剤がおすすめです。

日本で承認されている犬糸状虫症予防薬の投与経路・有効成分（2017.12.1時点）
〈経口投与〉イベルメクチン、ミルベマイシンオキシム、モキシデクチン
〈注射投与〉モキシデクチン
〈皮膚滴下〉イベルメクチン、セラメクチン、モキシデクチン

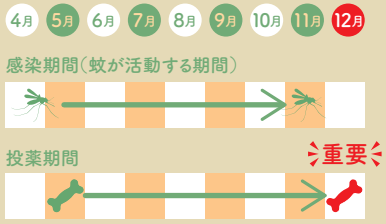
いつ投薬するの？

蚊の姿を見なくなってから、1ヵ月後まで投薬を

犬フィラリア症予防薬は、蚊の姿を見かけるようになった1ヵ月後から、蚊の姿を見なくなってから1ヵ月後まで投薬を続けてください。もし犬フィラリア症予防薬の投薬を止めてしまった後に、感染幼虫を持つ蚊に刺されてしまったら、その幼虫は犬の体内で成長を続け、翌年の春には心臓や肺動脈に住みついて予防薬では駆除できない成虫になってしまう可能性があります。

※蚊の活動時期は地域により異なりますので、投薬期間については必ず獣医師の指示に従ってください。

4月から11月に蚊が発生する地域の場合

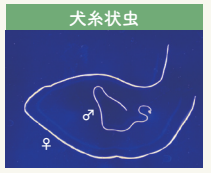


ご存知ですか？ フィラリア豆知識

Q フィラリアとは？

A 蚊が媒介し心肺へ侵入する寄生虫

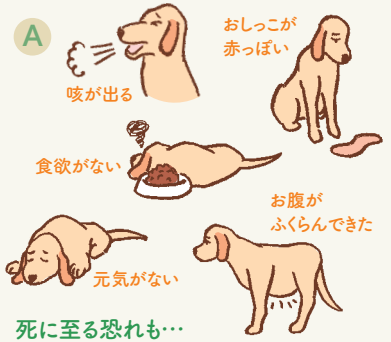
通称フィラリアと呼ばれる犬糸状虫という寄生虫が、心臓や肺動脈に寄生することで犬フィラリア症は起こります。蚊が媒介し、犬へ感染します。



そうめんのような細長い形。
成虫平均体長はメス28cm、オス17cm。

Q どんな症状が出るの？

A



死に至る恐れも…

心臓や肺動脈に寄生することで、徐々に血液の循環などに悪影響が出て、やがて体中の臓器に異常が起きます。放置すると死に至る場合も。

フィラリアの感染サイクル

1 蚊が感染犬を吸血
吸血時、ミクロフィラリア（フィラリアの幼虫）も一緒に蚊の体内へ。

2 蚊の体内でミクロフィラリアが感染幼虫に成長する。

3 他の犬に感染
蚊が別の未感染犬を吸血するときにその犬の体内へ感染幼虫が侵入。

4 感染幼虫が成長
犬の皮膚から侵入した感染幼虫が成長し、やがて血管に侵入。

ここで予防策を!!
体内に入った幼虫が血管へ侵入する前に駆除します。決められた期間、毎月1回投薬すれば予防できます。

5 心臓や肺動脈へ侵入

6 フィラリアがミクロフィラリアを産出
ミクロフィラリアを血液中に産出。体内中へいきわたり感染犬となる。